

『羅生門』小考

——「下人の行方は、誰も知らない」と『今昔物語集』——

星 山 健

一、『羅生門』改稿末尾の源泉

芥川龍之介の実質的処女作『羅生門』^①は、『今昔物語集』^②巻第二九「羅城門登上層見死人盗人語第一八」および巻第三一「大刀帶陣売魚姫語第三一」に拠るところが大きい。しかし、『今昔物語集』から『羅生門』への影響は、その二話に限定されたものではない。

『羅生門』末尾は初出（『帝國文学』大四・一一）において、

下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急ぎつゝあつた。

とされていたものが、第一短編集『羅生門』（大六・五）での小変更（文末を「急いでゐた」とする）を経て、『鼻』（大七・七）収録時には以下のように大幅に書き改められている。

下人の行方は、誰も知らない。

これについて長野誉一氏は、「むろん、現在見る本文の簡潔にして余韻嫋々たるに及ばない」と評し、また三好行雄氏^④は、初出表現を「技術の未熟」と捉え、「下人の行方は、誰も知らない」を「必然の一行」と解する。両氏をはじめ、その改稿を高く評価し、そこに作家としての成長を読み取る向きが強いが、実は書き改められたこの一文にも、『今昔物語集』が色濃く影を落としている。

吉田精一氏は、『近代文学注釈大系 芥川龍之介』^⑤収録の『羅生門』の頭注において、

この改稿は、『今昔物語』巻二九第一話の末尾「盗人は蔵よりいでて行きけむ方を知らず。」によつたものであるかもしれない。

と記す。重要な指摘ではあるが、その影響の源泉を、『羅生門』との内容的重なりが少ない巻第二九第一に見ることに疑問が残る。なぜなら、『今昔物語集』には同様の表現が頻出するからである。

後二行キ方ヲ不知ズトナム語り伝ヘタルトヤ。(巻第六第三四)

金剛般若ヲ取テ走り去テ不見ズ、其ノ行キ方不知ズ。(巻第六第四五)

掻消様ニ失ヌ。更ニ行ケム方ヲ不知。(巻第一一二二)

尋ヌト云ヘドモ行キ方ヲ不知ズ。(巻第二二第一七)

東西ヲ尋ネ求ト云ヘドモ、更ニ行方ヲ不知ズ。(巻第一七第四〇)

此ヲ求メケレドモ、行方ヲ不知ザリケリ。(巻第一九第九)

泣キ悲テ忽ニ失ヌ。更ニ行方ヲ不知。(巻第二〇第二七)

男ニ給テ追出シテケリ。其後行方ヲ不知リケリ。(巻第二三第二〇)

人ヲ分テ東西ニ尋サセケレドモ、遂ニ行方ヲ不知ラ止ニケリ。(巻第二六第一五)

其ノ後、行ケム方ヲ人不知ズシテ止ニケリ。(巻第二八第二四)

遂ニ行ケム方ヲ不知ズシテ失ニケリ。(巻第二八第三七)

「今ハ罷ナム」ト云テ、立チ去ヌ。行方ヲ不知ラズ。(巻第二八第四〇)

盗人ハ蔵ヨリ出テ、行ケリム方ヲ不知ズ。(巻第二九第一)

此ノ小男ノ行方ヲ更ニ不知デ止ニケリ。(巻第二九第三〇)

家ノ人見付テ噎ケレドモ、行方ヲ不知デ止ニケリ(巻第三一第三)

ちなみに芥川は短編集『鼻』刊行の前年に小説『偷盗』(大六・四、七)を発表している。これも巻第二九「不被知人女盗人語第三」を中心に『今昔物語集』から多くを取材した作品であり、その構想時にこれらの表現に目をとめ、

『羅生門』を短編集『鼻』に再録する際、末尾改稿の参考にした可能性も考えられよう。

右に列挙したように、「行方ヲ不知ズ」がまさに『今昔物語集』の常套表現である以上、『羅生門』の改稿末尾の典拠をその中のいづれか一つに限定する必要はないようにも思われるが、参考までに紹介しておきたい一話がある。巻第二三「広沢寛朝僧正強力語第二〇」である。

二、新たな典拠の可能性

今昔、広沢ト云所ニ寛朝僧正ト申人御ケリ。此人凡人ニ非ズ、式部卿ノ宮ト申ケル人ノ御子也。真言ノ道ニ止事無カリケル人也。

其人ノ広沢ニ住給ケルニ、亦仁和寺ノ別当ニテモ御ケレバ、彼ノ寺ノ壞タル所ニ、修理セントテ、麻柱ヲ結テ日毎ニ工共数来テ修理シケルニ、日暮テ工共各返テ後、僧正、「工ノ今日ノ所作ハ何カ許シタルト見ム」ト思給テ、中結ニシテ高足駄ヲ履テ、杖ヲ突テ、只独り寺ノ許ニ歩ミ出テ、麻柱共結タル中ニ立廻テ見給ケル程（二二）、黒ク装ゾキタル男ノ烏帽子ヲ引垂レテ、夕暮方ナレバ顔ハ慥ニ不見ヘシテ、僧正ノ前ニ出来テ突居タリ。見レバ、刀ヲ抜テ逆様ニ持テ引隠シタル様ニ持成シテ居タリ。僧正此ヲ見テ、「彼レハ何者ゾ」ト問ヒ玉ヒケレバ、男、片膝ヲ突テ、「己ハ侘人ニ候フ。寒サ難堪ク候ヘバ、其奉ル御衣ヲ一ツニツ下シ候ハムト思給フル也」ト云マヽニ、飛懸ラント思タル気色ナレバ、僧正、「事ニモ非ズ、糸安キ事ニコソ有ケレ。而ルニ、此ヲ怖シ氣ニ不恐ト云フトモ只乞ヘカシ。ケシカラヌ男ノ心バヘカナ」ト宣（フ）マヽニ、立廻テ男ノ尻ヲフタト蹴タリケレバ、男被蹴ケルマヽ、忽ニ不見ヘ。

僧正、「怪シ」ト思給ヒ乍ラ、和ラ歩ミ給ニケリ。房近ク成テ、音ヲ挙テ、「人ヤ有ル」ト呼び給ヒケレバ、房ヨリ法師走テ出来リケリ。僧正、「行テ火灯シテ来レ。此ニ我ガ衣ヲ剥ムトシテル男ノ俄ニ失ヌルガ、其レ見ムト思フ也。法師原呼び具ヒテ来レ」ト宣ヒケレバ、法師走り返リテ房ニ行テ、「御房ハ引剥ニ合セ給タリ。御房達速ニ

参給」ト云ケレバ、房ニ有ケル僧共手毎ニ火ヲ灯シテ、刀ヲ提ツ、七八十人ト出来ニケリ。

僧正ノ立給ヘル所ニ走り来テ、「盗人ハ何クニ候ゾ」ト問ヒ申ケレバ、「此ニ居タリツル盗人ノ、我衣ヲ剥ントシツレバ、「被剥ム程ニ悪キ事モゾ有ル」ト思テ、盗人ノ尻ヲフタト蹴タリツレバ、其盗人ノ被蹴ル、マヽヽ、俄ニ失ヌル也。極テ怪シ。火ヲ高ク灯シテ、「若シ隠居ルカ」ト見ヨ」ト宣ヒケレバ、法師原、「可咲キ事ヲモ被仰ル物カナ」ト思フカラ、火ヲ打振ツ、麻柱ノ上様ヲ見ル程ニ、麻柱ノ中ニツメラレテ、否不動様ナル男有ケル。法師原此ヲ見付テ、「彼ニコソ人ハ見ヘ候。其二ヤ候フラン」ト云ヘバ、僧正、「彼レハ黒ク装フタリツル男也」ト宣ヘバ、人数麻柱ニ昇テ見レバ、麻柱ノ中ニ落迫マリテ、可動キ様モ無クテ、踈キ兒造テ男居タリ。和纒ニ刀ハ未ダ持タリ。法師原寄テ刀ヲバ取テ男ヲバ引上テ、下シテ將参タリ。

僧正、男ヲ具シテ房ヘ返給テ、男ニ宣ク、「老法師也トテ不可蔑ニ、此様ニシテ悪カリナンゾ。亦今ヨリ後此ル事ハ可止シ」ト宣テ、着給タリケル衣ノ綿厚キヲ脱テ、男ニ給テ追出シテケリ。其後行方ヲ不知リケリ。

早ウ此ノ僧正ハ力極ク強キ人ニテゾ御ケル。此盗人ハ古ク被蹴上テ麻柱ニツメラレニケル也。盗人此ク力有ル人トモ不知シテ、「衣ヲ剥ム」ト思ケルニ、麻柱ニ蹴ツメラレテ、「必ズ其身ニモ恙出来ニケレ」トゾ人云ケル也。

近來仁和寺ニ有ル僧共、皆彼僧正ノ流レ也トナム語り伝ヘタルトヤ。

荒廢した寺の修理の様子見に来た老法師（僧正）を、夕暮れ方に引剥が襲う。しかし、僧正は怪力の持ち主で、彼が一蹴りすると引剥は姿が見えなくなってしまう。僧正がいったん寺に帰り、多くの法師を引き連れ、灯火を手に探すと、引剥は麻柱の間に挟まった無様な姿で見つかる。僧正は引剥を僧坊へ連れ、教え諭した後、自らが着ていた衣を与える。と、引剥はそれを持って立ち去った。引剥のその後の行方は知れない。本話の概要は以上である。

無論、主たる典拠である巻第二九「羅城門登上層見死人盗人語第一八」や巻第三一「大刀帯陣売魚姫語第三一」とは関係のあり方が質的に異なるものの、本話も『羅生門』と重なるところが少なくない。

まず、「引剥」である。『羅生門』の終わり近くに、「では、己が引剥をしようと思ひまいな」という下人の台詞があるが、『芥川龍之介全集 第一巻』の注解のとおり、『今昔物語集』巻第二九第一八にこの語はない。そして、『羅生門』

執筆時に芥川が参看したかとされる校註国文叢書『今昔物語 上巻』においてこの言葉に注が施されているように、芥川が『羅生門』を執筆した当時、「引剥」は一般的な語彙ではなかった。ならば、この語についても芥川は『今昔物語集』から学んだと見るのが妥当であろう。ちなみに『今昔物語集』に「引剥」の語は五例あり、その一つが本話のものである。引剥が相手の衣を受け取った後、行方が知れなくなったという結論において、本話は短編集『鼻』収録時の『羅生門』と共通する。

そして、建物の荒廃、夕暮時から夜にかけてという闇の深まりへの意識、引剥が相手を蹴る（相手に蹴られる）という設定の類似も、巻第二九第一八にはないものである。また、些末なことではあるが、本話と『羅生門』との間には、烏帽子・刀・灯火といった、言及される小道具の一致も見出せる。

もしすでに『帝国文学』掲載の初出『羅生門』の執筆時において、芥川がこの巻第二三第二〇をも参看していたという推測が正しいならば、「下人の行方は、誰も知らない」という一文は、『偷盗』の作品としての失敗の末に生まれたもの⁹などではなく、当初から『羅生門』の結び方の一つとして芥川の脳裏にあったのかもしれない。

三、芥川にとつての『今昔物語集』

『羅生門』における『今昔物語集』の影響については、主たる典拠である二話からの他にも、これまでさまざまな指摘がなされている。「頭身の毛も太る」が巻第二七「近江国安義橋鬼、噉人語第一三」に基づく表現であり、また、下人の服装についても『今昔物語集』が参照されていることは間違いない¹¹。『芥川龍之介新辞典』¹²『今昔物語集』の項が説くように、「芥川にとつて、『今昔物語集』および『校註国文叢書』本の頭注は、作品の細部を作るための辞書や百科事典の役割をも果たしていた」と言えよう。

そして、本稿における指摘もその延長線上にある。「今昔物語鑑賞」草稿¹³の記述を信じるならば、「中学生の昔から何度もこの本に目を通した」芥川である。あるいは、「行方ヲ不知ズ」のような常套表現は、第何話に基づくという

ことなく、自然と彼の心の中にとどめられていたものかもしれない。

いかなる議論が立てられるにせよ、『羅生門』が主として『今昔物語集』から素材を借りながら、極限状況に現れる人間の生の実相、日常的なモラルの剥落したところに露呈される生の本質そのものを、簡潔かつ鮮やかに形象化してみせた傑作であることは動かない¹⁾。

『羅生門』という作品自体の評価については、基本的に右の言に従いたい。改稿末尾の問題にしても、「下人の行方は、誰も知らない」と『今昔物語集』の同類表現とでは、一話における意味や重さがまったく異なることは言うまでもない。しかしながら、芥川が自身の実質的処女作であり、第一短編集のタイトルにまでした作品を最終改稿するにおいて、その最後の表現まで結果として『今昔物語集』に拠ったことの意味は大きいであろう。芥川にとつて『今昔物語集』とは何であったのか。それは作品の枠組み提供というレベルの問題を超えたところで、改めてその奥行きを深さを考えるべき、古くも新しい研究課題なのではないだろうか。

注

- (1) 本稿における『羅生門』の引用は、『芥川龍之介全集 第一巻』(岩波書店、平七・一一)に拠る。
- (2) 本稿における『今昔物語集』の引用は、新日本古典文学大系『今昔物語集 一〇五』(岩波書店、平五・五〇平一一・七)に拠る。
- (3) 長野普一氏「羅生門」(『古典と近代作家 — 芥川龍之介』有朋堂、昭四二・四)。
- (4) 三好行雄氏「無明の闇 — 『羅生門』の世界」(『芥川龍之介論』筑摩書房、昭五一・九)。
- (5) 吉田精一氏校訂・注釈・解説『近代文学注釈大系 芥川龍之介』(有精堂、昭三八・五)。
- (6) 注(1)書に同じ。
- (7) 校註国文叢書『今昔物語 上巻』(池辺義象編、博文館、大四・七)の巻第二三第二〇(本書では巻一三とするが、通常の巻数に訂正して示した)の頭注に、「衣を剥ぎ取る盗人にして今いふ追剥也」とある。

(8) 用例調査は新日本古典文学大系『今昔物語集索引』(岩波書店、平一三・四)に拠る。その他、関連語としては動詞「引(曳)キ剥グ」が四例ある。須田千里氏「羅生門で語られたこと」(『奈良女子大学文学部研究年報』三三八、平六・一二)も、『羅生門』の材源を探る中において、本用例に着目する。なお、本稿は『羅生門』と『今昔物語集』との関係を考察する上で、氏の論に教えられるところ大であった。

(9) 注(4)に同じ。

(10) 安田保雄氏「芥川龍之介の『今昔物語』——校註国文叢書——本について——」(『比較文学論考 続篇』学友社、昭四九・四)。

(11) 注(8)の須田論文。

(12) 清水康次氏『今昔物語集』(『芥川龍之介新辞典』翰林書房、平一五・一二)。

(13) 「今昔物語鑑賞」草稿」の引用は、『芥川龍之介全集 第二十一巻』(岩波書店、平九・一一)に拠る。ただし、四九八頁の「後記」に指摘があるように、「中学生の昔」の下に「学生時代以来」との記述が消されている点は問題が残る。

(14) 蒲生芳郎氏「羅生門」(『芥川龍之介事典』明治書院、昭六〇・一二)。

*本稿は二〇〇九年度宮城学院女子大学特別研究助成に基づく成果の一部である。